

# ステップファミリーの子どもたち調査(1)

## 継親の役割行動と継子の家族境界

○大阪産業大学 菊地真理

明治学院大学 野沢慎司

### 1. 目的

本報告では、親の離婚・再婚経験が子どもにもたらす影響を、ステップファミリーの継子の経験をもつ成人子を対象としたインタビュー調査から明らかにする。ステップファミリーは、再婚以前の家族での実親子関係があるところに、後から夫婦関係や継親子関係を形成しなくてはならない特有の難しさがある。離死別による一方の親の喪失を経験した子どもに対して、継親がどのような存在となるべきか適当なモデルは用意されておらず、その役割関係を形成するうえで継親子間は緊張や葛藤を抱えやすい。日本のステップファミリー研究では、継親の役割アイデンティティには多様性があるが、なかでも「親」になり替わろうとすることにこだわりすぎると、継親のストレスが高まる。また、継父よりも継母のほうが、当事者や社会から継子の「母親」となることに過剰な役割期待を向けられ、役割葛藤を経験しやすいというジェンダー差も見られている。しかし、これまでの日本の研究には子どもの視点は十分に取り込まれていない。そこで本報告では、子どもの視点に立って、継親の多様な役割行動がどのように受け止められているのかを探る。

### 2. 方法

おもに調査会社の登録モニター（関東・東海・関西地方在住）を対象にインターネット上で調査協力の募集に応募があった20名（男性17名、女性3名）へ、2012年10月から2013年5月に対面的半構造化インタビュー調査を実施した。質問項目は、①親の離婚や再婚の経緯とその受け止め方、②継親との関係とその変化、③親の離婚（死別）後に同居した親や別居した親との関係、④きょうだい関係、継きょうだい関係、⑤祖父母、継祖父母などの親族との関係、⑥学校の教師や友だちなどとの関係、⑦「家族」だと思える範囲（家族境界）など。対象者の内訳は、実母・継父世帯が15ケース、実父・継母世帯が4ケース、別居の実父・継母ケースが1ケースである。

### 3. 結果

子ども（継子）の反応は継親の役割行動と同様に多様なものであった。継母の厳しいしつけに継子が萎縮し反発するようになったり、別居実親の思い出を探したことを継父に咎められたことがきっかけで距離をとるようになったりするなど、継親のジェンダーに関わらず「親」になり替わろうとすると継親子関係に緊張感が高まる。離婚・再婚後に別居実親との関係・交流が断絶されていると、ステップファミリーであることを家族内外にカミングアウトしないまま別居実親の存在がタブー化され、継親子が互いに「親子」として意識しながら関係形成せざるを得ない状況が作り出されている。一方、ニックネームやオリジナル呼称の使用や、居住形態を変更して物理的に距離をとるなど柔軟な関わり方を実践する継親の場合は、親ではないが親密な関係に発達するケースもあるが、親しみを持てず疎遠となるケースもあった。

### 4. 結論

継親が「親」になり替わろうとすると、継親だけでなく継子にとってもストレスは大きくなるように見える。初婚の核家族をモデルにした家族境界の設定は、再婚後の名字の統一の変更や継親子間の養子縁組などの法制度や、初婚家族を前提とした教育機関の対応にも規定されている。離婚後の単独親権制度を見直し、離婚・再婚後の家族モデルに選択肢を増やす方策について検討していく必要がある。